

新編女水滸傳

五之卷

~ 13
3561
5



門へ13
號 3561
卷 5

新篇女水滸傳卷之五

浪速 好花堂主人野亭著



第九回

櫻女さくらむすめ与小姑こぢう遇あひま室津むろつ娼家ぢやうか
剛慶ごうけい會あひま妖怪やうかい闘たたか春はる白草しろくさ菴あん

著岸つし乃の此処こゝより陸くわ上かみと龍岡りゆうおう多おほ小こ談だん行ゆ小こ軒けん娼樓ぢやうろう不な至た
櫻女さくらむすめ益えき々々慥たつたと思おも上かみ祭まつり主ぬしと覺おぼ見みた婦人むすめ年とし廿に歳じ少せうとと覺おぼ見み
えと長身ながみ白面的しろおもての出来でき来きて足あし等らと談話だんわ終はつ了り櫻女さくらむすめ向むかひは身み必かな恐おそ怪かい
しと玉たま子こ此處こゝハ播陽はひやう室津むろつ乃の妾めかけ當家たうかの主ぬし春雨はるあめと申まを者もの一ひと聞きまり
は身みをを身み投な身みとといいしと定さだて深ふかき由緒よしゆ可有あ不な包た詰づと玉たまと

新編女水滸傳卷之五

早稲田大學圖書館
昭和34.6.3
藏書

誠心面色不露り尋ねるも、梅女よと泣く涙をぐり小答り思ひ
 けり再生は高恩を業でなむ。礼謝言詰ふ不演得候不毒と都
 方代者あふが故のつこ此播に居を占侍不処夫ある者眼病を患施不
 無術救ふ薬有ざる九孔の蜃珠と申人希世なる妙薬を有藏者
 是を買んとすを金銭不估物なる個人毒不想をうの辰虫珠と
 毒が身と交易せんといふ故所天不深く秘し身と辰虫珠小交易て彼人乃
 方へ行侍やしが兼て命を捨節義を全すや、思折柄拵を勤む
 故是幸いと心計を人の耽誤を見く投身し侍ふは不圖是成方
 不助らる今返存命侍ら此上の高惜ふ小剣を借く毒が節操を全す
 けり玉と詔りしを春雨龍岡禅月等々苦まじを感して便なく
 涙しなるが春雨諫言り六寅人如くを身を山身蓋世貞婦た毒賊

一、此家業は世を早業心を不持此六如何と、山身が良人を
 尋出度比目契を結を参り其死を急た玉の以日な
 と滞留し、再會の期を待玉と最鄭重小團りをも、梅女深く
 恩を謝し、従是春雨が方不是送るる後不清治が妹若狭八過日毒に
 も、之悪漢の為不辱し、を木枯るる救を情ある婦人
 思ひ居たり、存の外此春雨が毒小估渡れ大を不歎き悲しむもその
 無益當家小是をもむ内木偶を演し哥を唱ふ業を教へらるる容の
 宴を助くる身と成たでされと春雨情ある者あを若菜の年の
 不長を愁む、國中拵不使爲所生の如く梅女此家を幸ふ不嫌客に
 辱し、不蒙明暮又母の音信を待く不、梅女此家を幸ふと、五に
 身の憂苦し詰ると合らる、馴安さハ女同志少く、一、姉妹の如く馴睦に

寢食を便し若花の木偶舞は業を梅女小教梅女等胡琴を若花の
 教授て内房住ひもと氣は若花も若花も便し宴席小出入を春雨は請
 りれを免れ角とし宿し故西女比々宴席を勤る小が是が殊色不
 愛て嫖客又春雨が亭に多くと梅女を園中に誘ふと中を春雨是を
 不許酒宴の興をの副さるも且説秀蘭偏く諸及小道進してトを
 賣を各に左祖の真際をくくはあむく春雨が方小全まると密計を謀る
 小一日梅女を見ても絶望的を愛如何成方より買得しやと問小春雨
 梅女物語せ一條を話れを秀蘭は倚て一日妾小橋及龍野
 近郷小一箇の狛夫トと云をそと初小妾秘薬を授てせが必定那男の
 所由の者成が彼獵天を相小才氣勇力技群のすく渠を左祖小属
 させあむ自余の百騎小勝らで最屈強の良女を梅女をさく長く愛

に豆を滞しちを彼獵夫必尋未ゆが時計策を廻し恩を見せく左祖小
 うでとせが愛もあむと云をそと春雨を不悦び従是益梅女を愛し
 そ心を傾けさせる梅女は官義清が愛を密に愁ひ懣々して不樂此
 頃ハ酒宴の席も不着若花意ひく曰賢婦頃憂若面露路のむたて
 深く良人を慕ひ玉ふりてさむを主婦有情人を不遠して送る届け奉
 らせ小心を強持病を自發し玉いと諫れを梅女涙を流しよと諫
 り玉りて當屋まると不他思ひ奉り賢妹がれを露路隠さる様
 あし玉が所天八原未諸候の令曹少く渡せ玉が有故く愛を落の身と成
 籠紫なる清治と人を探りて羊途少く廻り逢候小花些下り
 此処少く難得住支出ましく此橋路小幽の源由あるを使小答まま
 途より海風吹き眼を患ひ板と真珠小身を交易小不斗當

剛慶間
夜關鬼
形



大正十年...



大正十年...

當宅の主婦、山僧と深く契りて、去此黃、那山僧の徒者、捨し知たり、然
ゆきを連珠といひ、号笛といひ、ゆき符合せを疑り、彼山僧が父母の
讎あり、あらず、耳語らば、桜女を誑し、何様故可有と、徒是、両女心を
扶同し、専ら入る者、心をとめ、敵の美否と候り、却統、五劍峯に
ハ、幸盛日々、徒黨と招く程、小勢稍強大、成と雖も、あも忠清、又子に
廻り、不、會、何、平、面、會、但、不、大、義、を、討、く、と、諸、公、を、尋、需、つ、大、和、路
を、南、都、不、出、春、日、野、を、通、行、一、個、の、公、羽、手、不、第、と、持、悠、然、と、誦、て、曰

昔為京洛聲花客

今作江湖潦倒翁

剛慶、思、憎、く、思、以、進、近、付、く、西、の、京、の、路、を、回、小、翁、委、しく、教、中、に、ま
形、頭、が、几、骨、と、離、た、剛、慶、禮、謝、終、て、曰、公、羽、の、形、貌、を、見、ゆ、不、確、々、な

士、民、も、も、る、ど、何、様、再、世、の、隱、ま、る、名、と、聞、ま、は、り、と、い、ふ、老、翁、微、笑、て、山、僧
ハ、好、事、成、人、系、是、ハ、此、春、日、郊、の、野、守、と、氏、を、種、姓、も、あ、り、と、村、に、和、り、と
公、又、剛、慶、拍、手、て、叔、ハ、和、歌、も、春、日、野、の、蜂、火、の、野、守、と、誦、せ、し、れ、風、流
の、老、翁、も、ま、不、付、く、一、回、の、ゆ、と、一、雀、鳥、の、野、守、鏡、と、誦、き、る、ハ、公、羽、の、鏡、を、い
所持、も、あ、り、と、同、答、て、曰、仰、々、吉、不、付、く、如、奈、れ、物、語、何、と、長、祐、成、と、ま、ま
原、未、野、守、鏡、と、い、ふ、夏、を、定、説、あ、し、但、し、此、春、日、小、住、鬼、有、て、昼、野
を、守、海、翁、と、い、ふ、夜、の、鬼、と、あ、つ、く、人、民、を、と、喰、ハ、那、鬼、一、個、の、鏡、を、所、持
され、野、を、守、鬼、形、の、持、鏡、あ、り、と、野、守、鏡、と、い、ふ、と、さ、き、と、最、不、信
説、少、く、誰、も、ま、妖、鬼、を、見、し、者、を、な、く、夜、中、う、れ、住、不、塚、の、辺、へ、行、し、ひ、も
あ、し、察、ま、る、那、鬼、と、い、ふ、と、鈴、麻、山、の、高、磨、大、江、山、の、酒、吞、が、類、ひ、の、強、盜、
は、侍、今、一、説、ハ、住、音、雄、略、天、皇、の、御、宇、當、春、日、林、不、巡、持、さ、せ、玉、い、ふ

御秘藏の白斑鷹とわく行方ちよび供部の百言彼処此方を尋常ふ
 一個の野守不遇供部の諸官翁不向御鷹行方やちよび有と向ふ
 翁冬々く曰く候御鷹此池中不て申令此を見せを一箇に溜池の
 何條御鷹鳥の水中不可在萬一死く池底不設せり心かちよびま
 るとと羽申如く鷹ハ水中不在熟視ハ行の松樹木居せり水底
 うつまる之と不悦び御鷹を得く主不獻まの由と天まに帝ちよ
 興じ思召公羽ハ種々の被物賜ふ候

と誦して野池を野守ハ鏡と言由是ハ有據旋あせむる原未野守の
 鏡と言ハ我若如の野翁且暮草野不在折節ハ池水滞水たどり
 老ゆ頭の雪を寫しぬけたる額の波を見余貯ち野翁がたちよび

幸の鏡をせと當春日野不限何回の野守も池水入溜水を野守ハ鏡と言
 如何で翁が可知長詰話ハ早日中西小傾たつ離別なれぬ袖を渾く行へん
 剛慶別とら又曰鬼人の住る場何方ハ有や翁が曰春日山ハ羊腹小老樹的有杉
 其辺ハ一箇草堂ゆる其傍ハ有塚と言昔も懼らぬ怪異の拙誰とちよ
 見届たぬ嗚笑止の僧とちよ何地共行く去たを剛慶冷笑したるハ
 妖怪變化なるも我歲月の行かぬ見届人最安る況や翁が言てハ
 山賊野盜の徒あるも一驚を喫せり我左祖小招多人と夕陽の頃ちよ春日山
 不令食侍ハ可謂大膽不敵也如此て春日山ハ登見せを老樹盤枝にて
 日色を隠し巖壁垣々音響清也されど剛慶ハ羽黒大峯と平路の如く

馳回し荒行者を物の数も不思に進み行早山小僧の昏々とし
 しく前路を不弁然に一株の老樹の下小軒堂と思へ右剛慶懐中鏡
 少く火繩に火をくはし是れを破果たる草堂に教下此傍を
 先打残たる床小座し妖物や毒物侍程小遠き梵鐘を叩く更を
 一夜頻に深檜梢風小動控て枯葉紛紛と荒狼振雲に叫鳴て旅魂を
 寒うもむさど勇敢不敵の幸盛耳をさし妖鬼の素もさ退屈し
 小欠伸しつ歩はる所小遠の方とて一点の火光ありま曲者ありと眼を
 とめり瞬眼はるるらう火光衝々に迫前未だを見せま面小丹塗の如く
 眼爛々として日月の如く耳際ま切く牙露く長き髪握りて比く
 身小慄け衣を着し糸一筋の鉄棒を杖はき一把の炬火を振照し歩
 形相身の毛もさした許ありも剛慶快も莫不思い侍り曲侍り伴

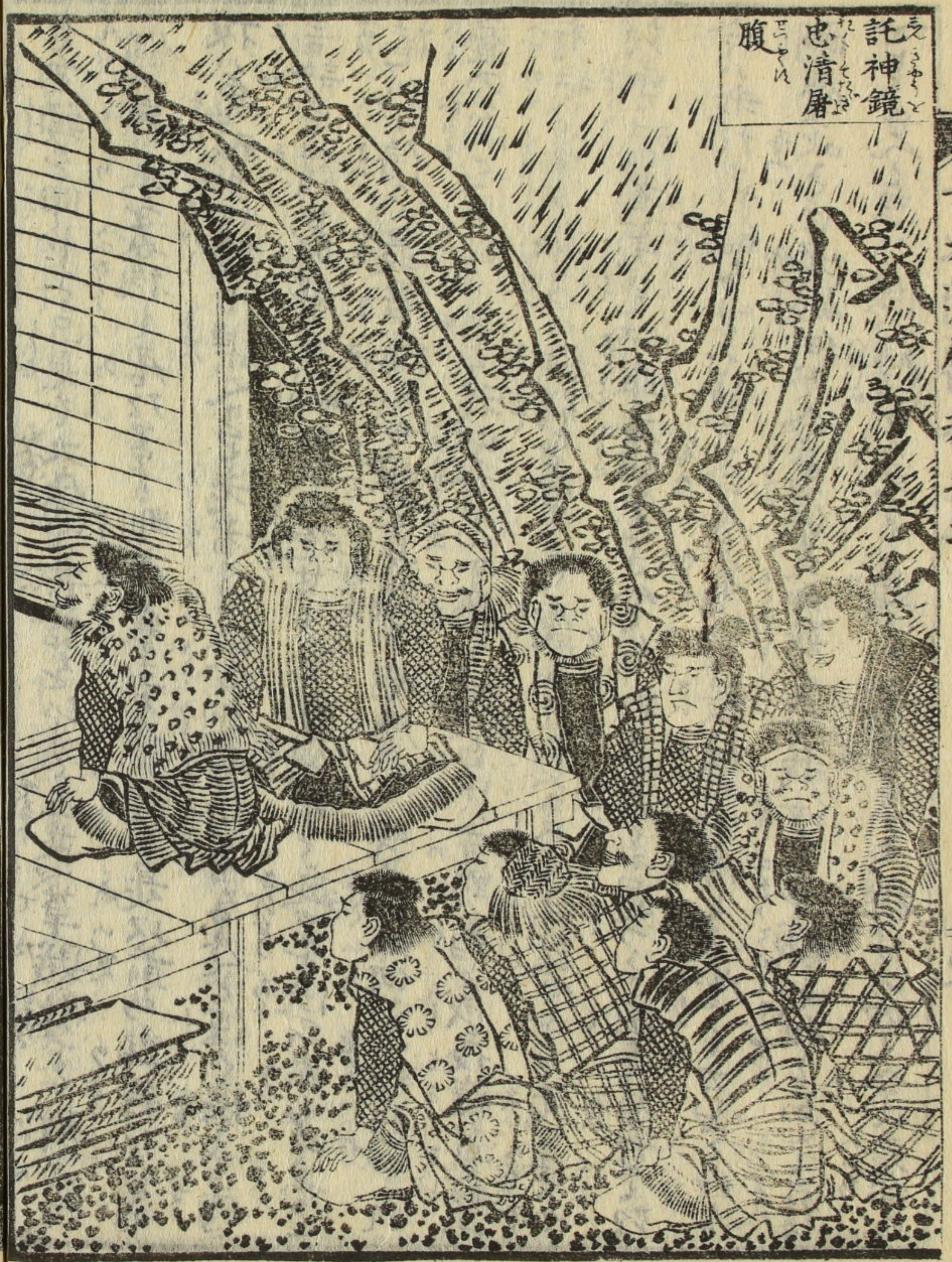
アハ鬼ハ菴中を窺見し剛慶を揺醒して曰如何小僧大膽少中夜に宿
 玉よの武誠の野守の鏡見すはしく思ま眼を両のち掻つて引起
 と剛慶泰然として不動光景を定規ふ小妖鬼又力強く遠く引起し
 たる時剛慶はとて鬼人の背を無手と組声勵すく日鬼形小打
 装束賊化粧の皮を露せと力を盡し組伏し鬼人早く身を焚う
 無言是を渾放ち長た鉄杖を振揚て曰我着春日明神の神使ふ此山中
 手を徑邪正を糾き重正鬼あるを山家と無礼之兒女と惑は雁貫終験
 呵責の杖小撃殺し焰羅王の廳前小引導してせま人鉄杖を渾て
 較干てく剛慶早く身を躍し是を避つ錫杖小を云たる刃を抜
 進く剛慶此時鬼人振捨し炬火州堂小燃付しが折節夜風吹ぬて
 燐々たる燈とさる小わいて四面明朗あれ両雄争く一住来秘術を

盡しつゝ闘争廿余合に及たども亦も雄ゆうを不決剛慶こうけい心中に駭おどさつ
 杖桑しやうそう不我ふが如此かく近闘ちんとう曲者まが有あらるゝと嘆息たんそくし急いそ小難勝せうなんしょうを知しり
 阿遮羅あせらの咒まじを誦おとし縛しばふとされと鬼人きじんの精神せいしん益々ますます加くつて劍法けんぽう不ふ乱闘らんとう
 不ふか剛慶こうけい尚なほ驚嘆きやうたんし先力せんりきを盡つくし闘たたかひらと鬼人きじんも剛慶こうけいの破やぶり力りき
 疾業しやくごふに懼おそれらるゝ肩色かたいろ小見こみふをて剛慶こうけい待まちたると大喝たいかくと初はじめ小鬼人せうきじん
 銃杖じゆうじやう少すくく丁ていと承剛慶じやうこうけい又取直またとらしと斬きるふ此時このとき鬼人きじんの運うんや盡つくたると人樹ひとじゆ根ねを踏ふ
 ららめたる名大深なだいじん切込きりこをたるとかれ強勇じやうゆう鬼人きじんも引放ひきはなつて退行たいかう何處どこ
 逆さかをて追行おひふ不思ふし指さふちりる時とき小声こゑの号笛ごうてつ圓まるく林中ちんちゆうと大勢おほせ馳出ちしゆを
 重おもし無難むなん高系かうけい縛しばたると那鬼形なきぎやうと重傷おもで小弱せうじやくと衆賊しゆうさく小抱せうぶせとるとる前路ぜんじゆ
 小左剛慶せうざこうけいと身みを山深やまじんへ入いり剛慶こうけい衆賊しゆうさく小引せういんとれ心こゝろもは行ゆ程ほど小山寨せうざんざい
 と覺おぼしつゝ閻えん地ぢ岩門いわかどの是こゝと今いま於お數十歩じゆしほゆと廣ひろ度ほど小引せういん居ゐられ

をて頭かぶを叩たたき只ただ見みを大床おほとこ小兵器せうへいきをひくと立並たてならぶ草賊くささく夥おほく群ぐん居ゐて
 一個いっごうの寨主さいしゆを女抱にむだし居ゐたると剛慶こうけい寨主さいしゆを熟視じやくしふ是こゝ以前いぜんの野翁のやうたるを
 扱あつ鬼形きぎやう不ふ化くわ猿ざる也なり渠みち之の老らう者しや不ふ似に合あ剛勇こうゆう何者なにものと深く怪あやしと
 言語げんごを並ならび發はせし寨主さいしゆ六叶りくえつ賊さく小抱せうぶせとる薬湯やくとう少すくく疵きず口くちを洗せんひ布ぬとと
 捲まけし倚より最苦さいく痛いたみ眼まなこを見張みはつ剛慶こうけいを覗のぞき如何いかふ山僧さんそう我われの
 昼ひるの公羽こううを見知みちる有あり我われ此春このはる日ひ山寨ざんざいを搆たへ白中はくちゆう野翁のやうと成なり夜陰よかげ鬼形きぎやう不
 打う杖じやう專せんら旅喜りょきの強弱じやうじやくをたると堂どうをくると夏多なつた幸しあふ然しかれども未いまだ汝なれ如
 女勇にむだゆう掛かの者ものとて見み何事なにこと左祖さそもさへ佯敗やうばいと退ひく不ふ過とつと疵きずを肩かたたて
 今いま我われたれ謹ちんむをせむ汝なれ今命いまいのちを宥ゆるむ最後さいごの念佛ねんぶつしと凄せつしく刀やをうけ
 剛慶こうけい叱しつ曰いは老賊らうさく何なにぞ人見ひとみ下したは如ごと新あらたち我われ汝なれ力ちからを誠まこと我われ奴やつとあてて後
 せとせんと思おもひ假かり縛しばを受うけと雖いれも我われ不ふ比ひむれを搵こ子の如ごとし今いま老命らういのちの



水戸黄門漫遊記



託神鏡
忠清屠
腹

水戸黄門漫遊記

保すもなほはあふ福を我姓氏を聞しうへす聞ゆく苗泉の土産不致
 せし一ゆをゆをさしとの荒縄すく切散らる並居は草賊を大主乃
 誰とて逃さか各々剣戟を取圍たて剛慶も白眼と曰何奈り
 小兒同前の汝等を恐て逃走はだま周樟をせど泰然たり形相小
 多くは賊けき氣を棄てて取て千を降し不得剛慶ハ席上はと上
 中位小平座しく寨主小對汝白頭乃今逆人を殺し財を掠し天誅
 不宥我刀下鬼とあら是自業たて志は汝剛賜勇敢區々く山賊
 をあは者ふらふに察せらる小才曾平家あどの残將少其姓名を名乗て
 死を決せよといふ寨主居直く曰我ら六汝が姓名を明せよ汝を賊
 と言て返す己が賊あるを隠す如何剛慶叱く曰我を賊と云無れこ
 苟も故大政道浄海が嫡孫二島冠者幸盛とハ我支く度又祖の讎を

傷と普く六合を横行し残兵とてり支専ら孝養のふしは汝が
 徒と同日小論せむと説話すると寨主聞て大に驚れし清盛君の孫
 君と何ぞの貴胃此曹子ありと問剛慶も時宗盛が落亂池田の侍従が
 腹の中より大緊を語せし寨主大に悦び拜し座を下りてが州賊小
 持せし刀追取後放つて我腹かきと突立たり小賊名狼狽と立駈ぐ剛
 慶も不審しく曰卿我名を聞て喜悅の顔色あり今又自ら如何成
 故あらんと問小寨主每度息を継ぐ曰公れ不審宜す是上総の忠清
 が零落果に候剛慶大に駭き扱我身も忠清あり弥以自害不審
 莫詳話と急し忠清剛慶と見く數行の涙を去り稍有と曰老父の
 公と比し左祖の余將を招集何卒錦會小讎言と二門西海小漂泊多
 を見捨つ此春日山跡を隠し堂をくろく裡不圖見忠光小廻逢知盛公の

遺命を汲く昼夜錢財を棄掠り軍実を集む先頃とて伊賀の平由
 入道一旦源氏小従も本心平氏を不忘と聞了忠光を使し實否を探り
 ちむる無二の忠臣かき堅く盟をかりて既小麻毛揚せんと評議最中
 然る今鳥公に面會我主皇孫と不知左祖小屬させんと談話日暮
 し其剛億を誠不絶倫の豪傑故陷孔逆あびる寄んと計じ小過重傷
 と肩たると是先主君を借り罰しよももとえげの言を幸盛聞かめ
 御忠誠を逞ちり又祖何を怒り罰さざるを忠清白今更話と無面小
 侍せり身れ過失を懺解し侍り往昔永曆元年頼朝を生虜既小ちり
 せむる也小池の禪尼深く頼朝を憐れ何幸小松殿小附く助命侍せり臣と
 招き無慮頼り玉頌小畏り内府言せざる原未仁怒の重盛君許諾玉
 ひ清盛君小種々謝玉のく蛭小島の流人多く飛彈瀬尾の輩是を聞て

諫め争ひ頼朝小悲しれ英物生置災害の基あふと許容せぬと僕
 彼等ぞ省り兵衛之祐一個生置をしく何程れ支々ゆくと強く貶謫小
 定めり是忠清が生涯の過失之其時瀬尾も心を合し途中の
 殺害しちて頼朝も今日の時小不遇を如何成天魔鬼忠清と馬麻者
 とあしく平家の福を残せり諸將小合し無面皮北國討兵のその後
 一門小別引別ぞ千苦萬苦して頼朝を祖も盛運頼朝も面會の
 使を不得老さる今日も生辱と晒し侍りぬれど一門小令させか
 忠清を怨り玉りち思ひ廻せも故君曹子小劍を借り誅し玉りあふ
 小不有然も世人小忠清と頼朝を憐れ扶し過中平家滅亡せよと
 猶老命を捨棄り生耻をさる後指差せり八耻辱れ上の辱耻成ハ
 速可死ハ覺期公伊賀小啓行玉平田入道見忠光等と心を併した義の

魔揚多し玉今も鬼の持鏡授け奉りて浪を起上り小祠の裡に
錦小包るる宝鏡取出し渡しれを幸盛手小取曰此宝鏡如何なる物
と曰小忠清曰西海より知盛君見忠光小守護を玉に内侍所の神鏡
是と聞て剛慶毎度押戴此板三種の神宝は箇ふ如斯靈鏡を
守護する卿故先刻の國は不動の縛を不承も宜也々と感懐する
忠清衛々小苦惱を増今先小向なる時苦息を絶く曰忠光が姉小福日
と号は尼の女ありし由力量勝せたる者侍ら今八行方だ小不知若
面會玉我遺念を継左祖可為由申玉と言幸盛曰玉小福月か
て按察は局と併し我寨中小在心を安んずる支勿せと聞之忠清此時
荒示と打笑しが勿言とく息絶了幸盛悲嘆小迫マが氣を勵し
如何不汝等寨主忠清死との六寨中は金銀粮米を平太が城中小運

送るを心を用ひ潜々小持運なり構へる外は支を慎し
過失をまひま右は指揮をせし州賊を唯々してそ用意をた
幸盛も内侍所のを懐中し尚萬支を下知し翼日伊賀小啓行し

第十回

逆徒議計策群集平太城
賊率偷盟約燒屯劍峰寨

話説伊賀國の任士平田道舎繼といふ士は平家の將佐後前司貞能が
あり且源氏小隆人ありしもの尚回主を不忘時々伊賀の平族をかこみ
謀及的を企む小忠清是を聞之忠光を使し力を併し先伊賀國大佐未
冠者之代勢小兼之近召乱入んと密小評議を多し日過しれを忠光
と此所小豆を正し忠清が死を不知處小一日春日山の草賊兩三個伊賀に

未^レく有^レし始末^ノを語^ルを忠光初^ニ衆兵大^ニ不^レ駭^クと雖^レも詮^ル方^ヲカ^レり
 幸盛^ガ支^ヲを圍^ム又^ニ心^ヲ勇^ム今^ヤと侍^レ裡^ニ小^ノ不^レ日^クあ^リ剛^ク慶^キ平^ノ四^ノ城^ヲ
 小^ノ城^ヲし^テ兵^ヲ幸^盛を請^フ中^位小^ノ居^ハ續^ク入^リ道^全上^ニ結^ビ心^光及^ビ
 富^田進^士前^ニ兵^衛尉^信濃^前司^書清^人と^シ列^ヲを正^シく連^座了^シ幸^盛を
 を拜^シく大^ニ不^レ宴^ヲを周^ル主^從の盟^ヲを以^テ不^レ忠^光熟^シ幸^盛を見^テ同^ク白^ス
 公^トや先^年鎌^倉大^藏谷^ノ林^中に^シ臣^ト組^仕合^ハ志^ヲ王^トや幸^盛味^ハ
 を啗^シ拍^板其^時の真^係忠^光也^ト忠^光笑^テ曰^ク臣^ト梶^原京^ノ館^ヲを潜^ニ
 出^林中^ニ儒^衣を縫^ハ不^レ圖^公子^組て宵^月の影^ヲ圍^ヒ大^雨降^リ出^シ故^ニ
 以^テ別^去了^シ時^雨不^レ降^ズ及^レ傷^ヲと^ル幸^ハ無^レ過^レ別^ヲ今^日の奇^遇
 遇^ヲ得^侍よ^ク語^セ幸^盛又^曰梶^原京^ノ邸^中に^シ獄^屋の鑰^ヲ用^且梶^原
 鍵^繩の危^急を救^シ我^後の木^枯と^シ渠^木枯^ク由^緒を語^セ衆^兵各^々

驚^嘆し^テ別^レ忠^光虎^ノ免^セ鶴^恩を感^謝し^テ斯^ク孟^明達^小回^リ
 酒^宴羊^酬不^レ及^テ幸^盛衆^兵不^レ對^シ曰^ク列^位回^恩を不^レ忘^却一^度鎌^倉不^レ離^セ
 今^ハ忠^節勇^ハ感^ズ有^レ余^熟城^兵の形^相を見^テ不^レ皆^入當^十的^的
 英^雄た^シ大^義成^就何^ノ疑^ハ不^レ又^不敏^{ナル}と雖^レも五^劍峯^ノ塞^ヲ
 六^サ芳^兼多^ヲを初^女雄^小秀^蘭春^雨忠^光が姉^禪月^多を他^當世^ノ家^ヲ
 傑^數十^負兵^士五^百不^レ死^テ仍^テ當^城と^シ五^劍峯^と兩^所不^レを揚^當城^ハ
 近^カ京^小攻^入帝^王を虜^ヤし^テ推^ク賴^朝追^伐の宣^旨と^シす^ル
 五^劍峯^ノ讚^岐を始^回國^ヲを切^おび^け西^國の殘^兵を招^ク不^レ日^勢力^ハ強^大
 成^ル賴^朝如何^不猛^シと^シ共^恐あ^リ不^レ足^ク支^トお^け不^レ言^放
 衆^兵高^論伏^シ富^田進^士八^頭武^畧め^ル士^を席^ヲを進^出
 曰^ク大^將の指^揮神^策と^シ雖^レも恐^ル不^レ盡^臣が愚^慮ハ^耶

五劍山之屈強の險山をれを主將三箇兵士二百騎守居を國土攻未は共
 守城せん夏最安う海なり當城公の要害の城のゆい今守る所
 兵士四百人不元宗徒の者十騎不足當國の大依々木内冠者惟義が
 代官少と取不足と雖も江以の依々木代々の真家傑少て當時の義秀
 初其見皆無雙の勇者たてそ上兵精く糧たる隣國又源氏をを
 救應心の依々木然不説の寄合勢を以て依々木家を倒さる又危し
 願く五劍峯の諸將及兵士過半當國未つて俱小失力を盡さず佐
 々木といふも恐るるに又四國を平定せんと宣ども是枝葉也我徒專と
 さら早く京師へ帝王を虐めしむる有然して後宣ふ如く頼朝が罪を
 數征伐の宣旨を乞請を師無名あべ左祖の諸候も出来はなり内りハ
 諸國小潛む木曾平氏の旗爪を望んぞ不招不奉と四國西國ハ不伐も可得取

と年古如流水一言千々の淀なぐさも勇あしく説きを幸盛始衆兵の理
 に伏し此義に決して讚ん小蜜使をつらし尚軍議をあらち春日山の賊等
 潜々に金銀を運送未て俱小嬰城しれを勢ハ稍強大ある不芦葉等も
 蜜使を得て木枯秀蘭多小寨を預け男子ハ皆時々兵争をひく各々
 伊賀に未せと勢凡十騎小向たされと謀及の色を不顯蜜々小
 商議して專ら旗上の時を候ひるを國土更小不知を却説五劍山の寨
 にと木枯秀蘭初屈強の女將州賊百五十余人を都司て專ら郡縣をかひ
 やうし或ハ旅人を懼し剛あるハ計策を以て擄ちし秀蘭が智古を以て
 利害を説左祖かすし無勇ハ行李路費を棄て軍費の資以供へ
 之指揮皆秀蘭が方寸とて出く一も之圖を不違誠に比稀成英也
 ち然不寨中の草賊の中に熊人といふ曲者ありさの勇力ハつれ共



久保のちよと
劍峯女徒
會群賊

久保のちよと
劍峯女徒
會群賊

倭兵を能震ひて重く用ひらむとて此者の出所を問ふ是依々木の若臣成
 高宮五郎ありて往日菊地を囚人を奪ひてとて更替の身と成之所ありて
 五劍山の寨に降参し邪舟を以て幸盛に阿て諛ふ自余の者とて出頭し
 然るが此頃幸盛初宗徒の者平田城に行き女將のこ寨中に残り居るを
 驕情の心を生し罪て若葉の室玉をみ殊色と愛如何少もして言と
 今思ふ多多日ありて此虚に棄し口説落さると淫念頻るは萌し一個の
 女に賄賂をうけ密に情書一通を授けしを彼女欲心小計き終不是を
 玉園に通じり玉園大に怒り先女を嚴に縛之置秀蘭龍岡小諾して
 熊人を誅せん憤は秀蘭白宗徒の諸將平太が城中に行き我々の
 當寨を守せと草賊等婦女と侮り輕く如此不正の議を以て早速
 斬り嚴く號令を示し威を見らるゑおきとも今既小大義成就の時

臨むを一個の士卒も輕忽殺さず不吉の兆たり不如何とて憤し
 様に計らざると言一日寨中の衆賊を残り集り大に不事を同し上位
 に木枯を座せしむ佐夫秀蘭玉園竜岡禎月夕虹弥生あを列を正し
 威儀堂々と座を占山海の真鳥を多く屠り如小盛陳觴を飲し
 酒宴稍阻みたる頃秀蘭白列位を今日此席小請むる更別義に何ん
 此度平田入道左祖に合體し錦倉小拒敵し再度平氏の世とて今既小旗
 揚近景有む魁主幸盛君を初宗徒の諸將伊賀に行て當寨我々小守せ
 手然る上と何時源軍後に押寄はるも固く守り勇威を二合に揮えん
 思ふ列位も日頃の盟約の如く力を併し勇強を敵に示さば依て今日一宴を
 同たし列位が日頃の芳苦を暗きと願はる義を鉄石に比して英名を長
 く後世に傳らるべしと演告し衆賊一齋聲をそり願はる形骨碎身して

他日の大恩を報しむるに思ふ心深切あれども此由疎畧ハ候はゞと今一時
禪月進出て曰列位の忠志神妙至極せし宗徒の男子も此案中なるを
法令を厳にせしめ賞罰正しくし其心の根柢あれを千初め法令
を見ればと一個は草賊を招け指揮せしむれば唯々として退れ那熊人嫌
頼と女を高千の縛り引居たり禪月曰此女櫻もは媒女をせんと
は糸頭なる不忠なるを女子といふもそ罪者し難し後未不法の輩是
を鑑もせしむと王國小目配せしむと王國其意を得席を起明是々たる白刃をねた
彼女が細首打落しつ是を盤小乗列座の面々に以て草賊もは法令の嚴なる
に膽を冷しし獨り熊人を懲の不成のこころは心中と辱しめし満面紅を
とくか如く黙然たて從夫秀蘭又其宴を盛んし黄昏に及ん各々退る
まろ小能人を深く王國を怒りて鉦平鬼魔太悪平次あやむ曲者を招き

谷陰の奇事い尚義と曰元未當寨の魁首幸盛公每雙の強兵はく
芦葉も又智勇此者もなれ此寨中に在る生涯山客たるを可く然る不
無益の旗しと鎌倉小拒敵せしと恐るるに抗あらず今鎌倉殿小新小
天下は惣追補使と四方八隅不属いも麾下に北條梶原和田兼山
ちんぞ智勇は名將百と以て數人ぞ一聲幸盛鬼神たるも千騎小不滿
小勢を以て何支う成果人必擒となく夏近地可有さの時我々も罪を
數らるる屍を郊原に晒し醜名を千載小残せ又痛まざるや不如當時
宗徒の者共の不在を幸い寨に火をけ王國秀蘭等も焼殺し鎌倉小
誹令をも重く賞を得て子孫の後榮を極め祖先の靈名をも揚げ卿等
如何思ひ王やと兵を震やと説かれを利欲に眼もた鉦平始皆々を
とや思ひん是に首肯せられ熊人大悦し潜小左祖をうたつ程小元未

大日本書紀卷之六

野武士山賊のまをりて前後の思慮も不入寒中過す熊人小子しり
 是や幸盛名も運の傾く端りも且説木枯秀蘭名も熊人及心を不知は
 何の用意もいふがゆふ夜秀蘭高樓に登つて星象的を改き見ゆれり
 東南の方野小客星位しりしが稍之先を減しきと秀蘭机を嚙と拍
 天をひらき主将幸盛大義不成しく遠くは刃に伏せたり如斯く心を
 碎たし年来の大望一時もたず我黨は微運して無念なれ空を白眼でた
 茫然たすかとも人力の不及天敷るれ如何ともなる術なく憂ひ胸
 て四方を見ゆふ山中俄に殺氣陰々しく起ゆ秀蘭再度駭然しく扱
 此山中にも内乱の萌ゆると言詰未だ不終小寨中二箇所とを猛火起りて
 秀蘭高樓を死下り木枯小斯くして早四面猛火盛余燃へ喝喚山谷を
 崩れり如く起たり木枯初秀蘭禪月玉園龍岡夕虹弥生得物くは後

黒烟の中を突出す所小折節西風暴く吹く火勢益々盛に黒烟地を捲て
 東西を弁へ争り上何れ敵何れを左祖なるまを不知を寨中鼎の湧が
 如く同士討し騒動もこれ共木枯もじり大膽の女将もあせを改し周樟
 せば午廻り侍女を二隊とて當身を幸に切く落し一條の血路を用ゑ山の
 子腹まで突出たり熊人鈍平等草賊を下知し八方を圍り各矢を放り夏
 雨の如し禪月玉園竜岡が輩大い小怒り憎れ及賊原ぞ物見せんと面を
 ゆづ切く木枯弥生夕虹秀蘭を太刀柳葉刀とむりあらし無二無二
 討くくをゆ賊名も明き逃走は鈍平等怒り文余は楯の棒とありて打
 振る弥生を目がけ一撃にせんは弥生早く身を躍りし是を避つ眉尖力
 水車に舞しく向い國小夏七八合やしく無難鈍平等腕切落しひるむころ
 長刀は柄をくゑいと声ひ鈍平等頭を斬りて両眼赤出り息絶たす夕虹を

大刀を抜きし敵中を斬り回す無端鬼魔大に行合大に怒り約小背
 人外恨の二太刀諸とてゆつし切り鬼魔鬼方原未大剛の曲者なれ
 乾笑了大奇を弄陣合戦五小一往一未争戦三十余合小及一時小虹
 心中に策とりけ佯敗り逃出し鬼魔大勝小棄り追り小虹腰間に
 狭し弓引返振返り兵と放つ小不過鬼魔大が骨肉を射抜しかを
 忽ち二声叫んで倒れ死に玉園八何卒能人を討ち怨を報せと馳回共能人々
 早く樹上身を屈り隠居れを終小守不逢士卒と撃ち支夥し禪月竜窟
 多も人礎を撃て荒回をも草賊等膽を冷し敢て近付不進禪月名尚も
 戦へ進むを秀蘭大い小制し竹賊何百人討ちて何の益も有る幸に各々命を
 全ち早雷思小省て益も且先春雨が方に行き策を廻し免も角もをいしと
 討建し侍女七八人を従住馴し五剣山を跡に見播路へともむれ

